

---

# 人は食べ物です

水銀。杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人は食べ物です

### 【Nコード】

N3591T

### 【作者名】

水銀。杏

### 【あらすじ】

『人肉食用化』された日本。これが本当の世界か分らない。誰がこの法律を決めたのか…。喰うか喰われるかの世界。

## プロローグ

私は夢を見ているのかも知れない。

小さい頃はちゃんとした生活をしてたはずなのに、いつの間にか、ありえない世界になっていた。

それは…人が人を食べるということ。

実際は食べることなんて許されていないが、

この世界では当たり前のように食べている。

酒やたばこ、薬物的な要素のようだ。

興奮作用・幻覚など、人を快楽に落せる魅力。

薬物に含まれる依存性はなく、誰も躊躇がないようだ。

もちろん、自分の体も食べることが出来る。

何故か生えてくるのだが、心臓が脳を食すと再起不可能らしい。

そして…

私は今の状況を疑っている。

「私知ってるの、お前がナイトメアを殺したことを」

ナイトメアは私の弟である。

私は18歳で、弟が15歳。

話しかけているのは、

「自分より若い奴の脳は、熟した中年より美味なんだよ。…セナ？」

セナは私の名前。

そして、コイツは柚原。<sup>ユスハラ</sup> 幼馴染みであり、彼氏である。

柚原は私の家に来ると、ナイトメアとゲームで遊ぶぐらい仲が良か

った。

なのにコイツは、弟を食べたのだ。

「アッチの世界で、殺しておくべきだった!!」

これは私が体験した

変わった世界の話である

## ブログ（後書き）

次話 今週中

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
感想・誤字等受け付けます。

## 1・日本の異常（前書き）

本格的に話が始まります。

## 1・日本の異常

私の両親はナイトメアが産まれ、数日後自殺した。

祖母の家に住むことになったが、病の為に6年前に亡くなってしまった。

今は私とナイトメアとの二人暮らし状態になっている。

「お姉ちゃん、夕飯まだー？」

「もうすぐで作り終わるから、テーブルの上を片付けてね」

ナイトメアは広げた宿題を片付けながら、カレンダーを見た。

「…今週の土曜日、アイツ来るの？」

「ん？柚原のこと？…来るけど？」

悲しげな顔をしながら私を見た。

いつもなら来るのが分かったら喜ぶはずなのに。

「なんで？」

「アイツ…前に来た時、僕を殴ったんだ」

「！？」

ナイトメアは泣き顔で話始めた。

先週の土曜日に柚原が家に来た。

私と話してから柚原は、いつものようにナイトメアとテレビゲームすることになった。

楽しげに遊んでいるところを見て、私は夕飯の材料を買いに行くことにした。

それからだった…

「最初は頭を叩いた…そして頬を」

じゃれてるつもりだと思ったみたいが、力は本気だったらしい。

私が買った物から帰って来た時には、柚原は帰っていた。

「…ナイトメア？」

一人でテレビゲームをしている。特に変わった様子はなかったが、

「お姉ちゃん…あの」

「まさか…あの時言った、口の中切ったのって…」

ナイトメアは口を大きく開けて、私に見せた。

口内炎が潰れたように、出血した後があった。血はもう止まっている。

「でも、なんで柚原に殴られたって言わなかったの？」

「だって…お姉ちゃん、柚原のこと好きじゃん？」

「それとは別の話でしょ？」

私は柚原の家に行くことにした。自転車ですくらのところに住んでいる。

「なんだよ…」

チャイムを鳴らすと、柚原が出てきた。

「なんでナイトメアを殴ったのよ？」

すると柚原は一旦家の中に入り、新聞紙を持ってきた。

「このニュース知ってるか？」

私に見せたのは、大きく貼りだされた写真だった。

写真には内閣総理大臣が写っている。

見出しには、『人肉食用化』と書いてある。

「何これ…」

私は経済的問題で新聞は買っておらず、

学校と家事の両立でテレビニュースを見る機会がない。

だから、このニュースを知ったのは初めてだ。記事を隅々まで読む。

『人肉食用化について 実験・解剖・論文等の結果から、

人肉は食しても遺伝子や染色体に変化がなく、脳細胞にも異常が見られなかった。

一部には化学反応を示す人間もいるが、大抵の人間は食しても大丈夫らしい。

効果は嗜好品と一緒にようで、依存性はかなり低い。  
自分の人肉・他人の人肉（得る場合は許可が必要）は、心臓か脳を  
食さない限り復活が可能』

疑うしかなかった。

こんなことがあっていいのか？

「柚原…」

「自分より若い奴の肉はおいしいみたいだな」

「まさか、ナイトメアを食べるつもりで殴ったの？」

柚原は笑っている。

「んなわけないだろ？…ただ、俺の方が上だってことを教えただけ  
だ」

そう言いながら、家のドアを閉めた。

またチャイムを鳴らす、出てくる気配はなかった。

私は柚原に新聞紙を返し忘れた。

「これ…ナイトメアが見たら…」

その新聞紙を片手に、家に戻ることにした。

## 1・日本の異常（後書き）

次話 0521～0523のどこかで

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

感想・誤字等受け付けます。

## 2・これは真実

家に着いて、夕飯を食べ、自分の部屋に入った。  
もう一度新聞紙を広げる。

信じていいのか分からない記事…人の肉って、

「…食べれるもんなのかな？」

私は軽く右手の人差指の先を噛む。いくらなんでも本気は出せない。  
思いっきり噛めば、皮膚がちぎれるのだろうか？

内出血だけで終わるのではないか？

試したくはないが、どうなるのか気になる…。

「うう…」

横になる。

こんなことは考えたくないが、

人肉の味が気になってしょうがない。

「柚原が見せたのは今日の新聞…前からこんなことが話題になってたのかな？」

深く考えるのはやめて、もう寝ることにした。

次の日、自転車に乗って高校に向かう。

朝、新聞に載っていたあの記事がテレビニュースで流れていた。  
キャスターも評論家も政治家も、誰も否定していなかった。

私が知らない間に、この話が進んでいたのかな…。

「ニュースって見ないとダメだわ」

もちろん、私のように『人肉食用化』を反対してる人だっているはず。

学校に向かう途中の信号が、赤信号になったため止まっていると、  
私の隣に一組の親子が来た。お母さんはまだ若く、男の子は幼稚園児のようだ。

（…ん？）

男の左手首に包帯が巻かれていた。

（どうしたんだろ…）

お母さんが男の子を見ると、男の子はニツコリと笑った。

「ママー、きょうになつたら、てくびのきず、なおってるかなあ？」

「昨日噛んだばっかでしょ？まだ治らないよ」

すると、親子は声を出して笑っている。

（噛んだって…男の子が？）

青信号になり、親子は手を上げて進んだ。

学校に着くと、玄関で友達と会った。

「セナ！おはよう」

「菊ちゃん！おはよー」

同じクラスの菊ちゃん。少し天然なところがあるが、可愛い女の子だ。

クラスに入ると、いつもどおりに賑やかだった。

「セナあー菊うー」

「ゲムツ…うわー！」

いきなり飛びついて来たゲムフア。私の友達。幼い感じがある女の子。

「sakuが二人が来ること待ってたんだよおー！ね、saku？」

「…待ってた」

窓際の席に座ってたsakuが私のところへやってきた。

あんまり表情を変えない大人しい女の子。普段はこの4人でのことが多い。

「<sup>サク</sup>saku、なんかあったの？」

「セナ…この記事知ってる？」

「…ああ」

sakuは机の上に週刊誌を開いた。そこにはあの『人肉食用化』の記事が載っている。

私は軽く頷くと、sakuはある1文を指差した。

「ん？」

「…これ」

「『高校生以下のお子様を持つ家族様へ』…って？」

高校生以下…ナイトメアが該当する。

「朝刊にも詳しく載ってた…セナ、新聞買ってないでしょ？」

sakuは私に週刊誌を渡す。1文の下に、箇条書きで何かが書いてある。

- ・ 3歳未満のお子様…親の同伴を強制 15時以降は家から出さない
- ・ 幼稚園児…親の同伴を強制
- ・ 保育園児&保育所…終始、警備を設ける
- ・ 小学生…授業は14時まで 先生同伴の集団登下校
- ・ 中学生…授業は15時まで 集団登下校

「何これ…」

「若い奴の肉が狙われるってやつだよ…前に女の子が誘拐されたってさ」

菊ちゃんが複雑な顔をしている。そういえば、小学生の弟がいるんだっけ？

「でも、ナイトメアこんなこと言っただけなのに…」

「正確には今日からだから…学校でプリントとか貰ってくると思う」

「今日からって遅いよね…、結構前から話題になってるのに」

私はsakuに週刊誌を返すと、菊ちゃんと目を合わす。大きなため息をつく菊ちゃん。

「あの時は少子化が問題だったのに…子供が増えたとなん、変な制度作るなんて」

？

「あの時って…？」

私が菊ちゃんに問い出すと同時に、チャイムが鳴った。

## 2・これは真実（後書き）

次話 0522（10時）  
感想・誤字等受け付けます

### 3・君を見て

授業中、

（私、いつからニュース見てないんだろ？）

菊ちゃんや朝のニュースでも言ってた…、これは前から話になって  
いることを。

でも、私が知ったのは柚原から新聞を見せてもらった昨日のことだ。  
いくら家にいるときは家事に追われて大変でも、テレビは見るはず。  
ず。

っていうか、こんな話が出たら学校で話題になってるはずだし…。

（なんで…何も知らないんだろ？）

放課後、部活動に参加してない私たちは帰る準備をした。

「菊ちゃん、弟大丈夫？」

「ん？お母さんが学校へ迎えに行くみたいだし…大丈夫だよ。セナの弟は？」

「集団下校っぽいし、近所に友達いるからね」

ガラッ

「セナいるか？」

「！？」

隣のクラスの柚原が教室に入ってきた。

私のところにやってきたが、目をわざと逸らした。

「話がある。一緒に帰るぞ」

「あ、菊ちゃんと帰るから…」

「いいよ！いいよ！セナ、一緒に帰っちゃいな！」

「はあ？」

「ありがとな」

菊ちゃんに強引に押され、柚原と帰ることになった。

自転車登校してない柚原は、私の自転車で二人乗りして帰ることに  
なっている。

「一緒に帰るの久しぶりだな」

「…」

「おもっ」

「うるさい！」

周りからみれば、カップルに見えるかもしれない…

まあ、付き合ってるのは確かだが。

「どこで話すの？」

「俺の家」

「え？」

「…なんもしねえから」

付き合い始めたのは中学3年の時、幼馴染みで仲が良かった私と柚  
原。

同じ高校へ入学することがきっかけで、付き合いことになった。  
付き合うのはよかったが、正直、男として見る事ができない。

お互いの家に遊びに行っても、話したりゲームするぐらいで、  
カップルらしいことはしたことがない。もちろんデートも。キスは  
したことがあるけど。

友達感覚だが、皆から公認カップルとなっている。

「まあ、座れよ」

柚原の部屋に入り、クッションに座る。

「話って何？」

すると、柚原はカッターで自分の左手の小指の先を切った。

「！？」

少しずつ血が出てくる…

「なにやってんの」

「…舐めろ」

血を私の口の前に出す。

「ちよっ…」

「いいから!」

私は思いっきり目を閉じ、ペロツと舐めた。

「…ん!？」

「だろ？」

血は鉄の味がする…しかも、人の血なんて…と、思った。

一瞬にして何かが変わった。

「おい、しい」

甘さと刺激が、足元から頭へと伝わる。

「俺も最初は驚いた…。これぐらいの切り傷なら2時間ぐらいで治るからな」

「…でも痛いでしょ？」

「そーでもない」

柚原はさっきの切り傷に再びカッターを喰い込ませた。

傷口は広がり、血がポタポタと流れ落ちる。

「!??」

「どんなに切っても、皮膚や肉や骨は生まれ変わる…だが、神経だけは無理らしくてな」

「？」

「指を切ったのは初めてじゃない。神経がないから痛みなんかねえよ」

何故か私は関心した。

一度痛みを我慢すれば、永遠に食することができるのだ。

「…そうなら、なんで子供を狙う人がいるの？」

また生えてくるなら、自分のを食べればいいのに」

「そりゃ俺と違って、自分を傷つけない奴だっているからな。

抵抗を知らない子供を食べたがる奴が多い。しかも、脳ミソや心臓が小さく凝縮されて、

新鮮でおいしくてネットで流れてるんだ」

狙わない奴がおかしいだろ?と、柚原はニヤニヤしながら言った。

昔から何を考えているのか分からない時がある…そこがたまに怖い。  
「安心しろ、弟にはなんもしねえよ。また遊ぶ約束してるしな」

柚原は血がついた指先を、私の唇になぞり、それを舌で舐めた。

### 3・君を見て（後書き）

次話 0525（10時）

感想・誤字等受け付けます。

#### 4・だから嫌い

「お姉ちゃん！お腹空いたよー」

「あーごめんね！今作るから！」

帰宅した時は18時を過ぎていた。

宿題を済ませ、テレビゲームをしているナイトメア。

そっか、14時に学校終わったから早いのね。

テーブルの上には、1枚のプリントが置いてあった。

あの週刊誌に載ってあった記事と同じことが書いてある。

「ナ……」

学校でどんな話を聞かされたのだろうか……と、気になったが、聞くのを避けてしまった。

冷蔵庫を開けると、もう食材が少ししかなかった。カレーぐらいなら出来るかな？

野菜を切っていると、視線を感じた。ナイトメアがこっちを見ている。

「……どうした？」

「お姉ちゃん、アイツの家に行ってたでしょ？」

「だから？」

「僕、アイツ嫌いだからね」

ナイトメアの声は、低く張っていた。まあ、殴られたらこんな態度にもなるか……。

「柚原謝ってたよ。それに、今度またゲームで遊ぶんでしょ？」

多分、柚原はナイトメアと約束した後、殴って帰ったのだろう。

「明日来るから……。あ、私がいれば大丈夫でしょ？」

ナイトメアは浮かない顔をして、ゲームを続けた。

私は一呼吸して、また野菜を切り始めた。

下唇を軽く噛んだ。まだ柚原の血と唾液の味が残っている。

よく分からない感覚に落されかけた……。それはすごく実感した。

できたカレーライスをテーブルへと運び、食べて、風呂に入って、寝ることにした。

その間、ナイトメアとの会話はなかった。

朝、目が覚めた。

昼過ぎに柚原が来るから、ギリギリまで二度寝することにした。というより、体が上手く起こせないくらい、疲労が増していた。ピンポン……

誰かきた……。耳では聞こえてるのに、体が動こうとしない。

「お姉ちゃん！ピンポン鳴ってるー！」

1階からナイトメアの声が聞こえた。

朝早くからやっているアニメを見るのが日課のナイトメア。もちろん、土日は私より早く起きている。

「お姉ちゃん！もう！」

私がまだ寝てると思ったのか、玄関のドアを開ける音がした。ガチャ……ッ……

その音を聞いたとたん、瞼が急に重くなった。

「……！」

再び目が覚めると、時計の針は13時を示していた。

私はクローゼットから適当に服を出して着替えて、1階へ下りた。

「ナイトメア！！柚原……が……」

目の前に広がる光景を見て、一瞬で驚愕した。

リビングの床や壁が、真っ赤に染まっていたのだ。

「あ……ああ……」

私は足に力が入らず、ガクンツと座り込んだ。座ったところ、血がベッタリと溜まっていた。

テレビの音に気付き、そっちを見た。

この音はナイトメアがいつもやっているテレビゲームの音だ。だが、ゲームをやっているのはナイトメアじゃない。

「柚原…」

「…ん？」

柚原はこつちを振り向く。口の周りには血が付いている。頭の中で何かが途切れ、そして繋がった。

「食べ…たの？ナイトメアを…」

「…」

自分の服の袖で口を拭いた。そして、笑う柚原。

「俺が知るか」

そういうと、柚原は持っていたゲームのコントローラーを、床に思いっきり叩きつけた。

#### 4・だから嫌い（後書き）

次話 0527（10時）

感想・誤字等受け付けます。

## 5・隠れてる

柚原は白から真っ赤になったソファアに座る。服全体が血まみれだった。

目を合わせているのが怖い…。今の私、青ざめているに違いない。震える。ベチャ…と、掌にナイトメアの血がつく。

「あ…あ」

「…セナ」

柚原は私の頭を撫でた。

「本当のこと知リたかったら、ここ綺麗にしてから俺の家に来い」  
笑いながら家を出た柚原。

数分後、パトカーのサイレンが聞こえ、警察官が入ってきた。

「セナ！」

「あ…菊ちゃん」

私は保護され、警察の待合室に菊ちゃんが来てくれた。

今の私に、身内がいなかった。

「あとでsakuとゲームファが来るからね！」

「…ありがとう」

まだ震えが止まらなかった。

シャワーを借りたが、爪の隙間に少し血が残っている。

菊ちゃんは警察から事情を聞いたらしく、優しく抱きしめてくれた。

「一体誰が…」

『柚原』と言えば、全てが解決するだろう。…だが、それは時間の問題。

指紋だつて残ってるし、柚原は血まみれだったから、誰かが通報してくれたんだ。

警察が私のところに来た。

「ナイトメアさんは…あなたの弟さんですか？」

「…はい」

書類に何かを書くと、その場から立ち去って行った。

「菊」

「あ、saku!…?」

sakuの後ろに、誰がいる。ゲムファじゃない。

「saku…その人は?」

「…お父さん」

「はじめまして、sakuの父の<sup>タクマシ</sup>takumatuだ。ここの警察長を務めている。

セナちゃんの事件については、全力で協力しよう!」

厳つい人が、笑顔は明るかった。

「セナの家で調べることがあるらしいから、今日は私の家に泊まって。ゲムファにも伝えた」

「ありがと…saku」

外で待っていたタクシーに乗り、sakuの家へと向かった。

モノトーンで落ちついた部屋。数分後、ゲムファがやってきた。

バイトで店長に怒られて遅れたらしく、その話で少し盛り上がったが、

話が終わると、長い沈黙が続いてしまった。

友達の身内が死んだんだ、ずっと笑っていられる場合じゃない。

この気遣いが、セナには深く伝わった。

「あの…」

「…?」

言えはいんだ。アイツの名前を…ナイトメアを食べた奴の名前を。

「…」

「セナ?」

口が上手く動かない。言ったらいけない気がした。

なんでもない…それだけ言って、いつの間にか眠りについていた。

早朝、携帯電話のアラームが鳴る。

普段から早く起きているセナは、自然と目が覚めた。

皆は…起きそうにない。

アラームを止めると、携帯電話にメールが来ているのが分かった。

『新着メール6件』…全部柚原からだ。

着た順から開いていく。空メールが続く…そして6件目、やっと文が書いてあった。

「…え？」

そのメールは今さつき着たものだった。

『友達の家にいることは知ってる。

起きたらすぐに俺の家に来い』

## 5・隠れてる(後書き)

次話 0530(10時)  
感想・誤字等受け付けます

## 6・愛してるお前を

「セナ…どこ行くの？」

「あ…」

布団を片付ける私に気付いた s a k u。

私は柚原のメールに従うことにした。

「ちょっと散歩してくるね」

「…二人にも伝えとく」

まだぐっすりと寝ている菊ちゃんとゲムファを見た。

「セナ…早く帰ってきてね」

軽く頷いた。なんか、悲しそうな顔をされた。

柚原の家の前に着くと同時に、家のドアが開いた。よく見慣れた顔が私を見る。

「早かったな」

「…」

「飯食べたか？」

「…」

自然と首を横に振った。昨日、ショックで何も食べることが出来なかった。

「今作った、食べるか？」

「…人？」

「違う…いいから入れ」

モグモグ

「おいちいー」

2階にある柚原の部屋へ。出されたのは、ハチミツがかかったフレンチトースト。

柚原は普段から冷たくて、口が悪くて、態度がデカくて、目がつり

上がってるのに…

「朝からフアントジーな朝食ですね！」

「おい。…謝れ」

久しぶりに自分以外の人を作る料理を食べた。

何枚でも食べれそうなくらい美味しい。でも…コイツは

「柚原…なんで、ナイトメアを殺したの？」

「…正確に言うと、殺してない」

「食べたの？」

「ああ」

あまりにも即答すぎて、頭がキレた。

持つてるフォークを柚原に向けて投げたい気分だが…それが出来ない。

私はコイツのことをよく知ってるから。

「話、最後まで聞けるか？」

「…っ」

「食べ終わってからな」

柚原は嬉しそうだった。

空いた皿をキッチンに持って行った柚原。

改めて思う…私は柚原の部屋の二オイが嫌いだ。

二人でいる時は分らないのに、一人になると、すごく分かる。

（心のどこかで…認めてんだろうね。柚原のこと）

目線を下に落すと、前に来た時に柚原が流した血が、カーペットに染みていた。

…そつえば、お父さんいないのかな？

柚原の両親は離婚して、今お父さんと住んでると聞いたことがある。仕事なのかな…まあ、聞くほどでもないか。

（…あれ？）

私はもう一つ、別の疑問が浮かんた。

ガチャ、柚原が戻ってきた。

「ん」

あつたかいコーヒ―を淹れてきてくれた。

「ナイトメアのこと、言つてよ」

「…俺がセナの家に行つたのは、お前が起きてくる数分前だ」

「……は？」

柚原は面倒臭そうに話始めた。

「俺はドアの鍵が開いてたから、勝手に入ったんだ。そしたら、リビングから物音が聞こえた。

覗いたら血まみれになつててな…そこにガキが一人いた。しかもナイトメアに似た奴が」

「!？」

「そいつは何かを食べてた…んで、俺に気付いて急いで家から出て行つた。

顔は見えなかった…そいつが座つてたところに腕が落ちてた。大きさにナイトメアだと分かつた。

俺はそれを喰つて、ゲームを始めようとしたら、セナが下りてきた…それだけ」

「え…」

柚原はナイトメアの腕しか食べてないの？

ナイトメアに似た奴？どういうこと？あ…

そつえば、朝一度起きた時にドアが開く音がした…そいつが入つてきたつてこと？

「柚原じゃないの？」

「犯人扱いすんな…まあ、そのうち警察を敵に回すけどな。それと、

」

私に新聞紙を渡す。今日のだ。

「？」

「見れば分かる」

え…

小さい記事だが、私は驚いた。

## 6・愛してるお前を（後書き）

次話 0602（10時）

感想・誤字等受け付けます。

## 7・ただ守る（前書き）

後書きに作者からどこでもいいコメントあり。

## 7・ただ守る

「偽者？」

その小さな記事には、こう書いてあった。

謎の組織と人身売買

先日、都内某所で女子高生（17）の死体が発見された。

衣類は着ておらず、両足切断、胸部のところは完全に切り開かれ、心臓はなかった。

指紋等から無職の男性（42）、他4名が逮捕された。

男性は『ある組織から女を買った』と、話している。

女子高生の両親は事件当日、『死んだはずの弟と知らない人たちが家にやってきて、

娘を連れていった。弟は数日前誰かに殺された』と、話している。

今、謎の組織によって家族の『偽者』が作られているようだ。

『偽者』は『本物』を殺し、家族になりきり、家族を暴走族やホームレスなどに売りつけるらしい。

謎の組織については、搜索中。

「…」

「と、いうことだ」

明日ぐらいには大きく載るだろうな…柚原はつぶやく。

「じゃあ、ナイトメアの『偽者』がどこかにいるっていうこと？」

「多分な…そいつ、俺のこと殺したかっただろうよ」

「なんで？」

「計算外だろ、ナイトメアを食べてるところを見られるのは。でも、時間が掛かり過ぎた。

俺の存在を気付かないぐらい必死で食べてた。証拠を残さないために。それで、

俺を殺してたら、時間がないと思って逃げたんだろ」

「え……」

「俺を殺したら、セナの前に現れるだろうな」

「そんな……」

私は少し混乱していた。

柚原も私も狙われている。もし、柚原が殺されたら……。

「うう……」

涙腺が一瞬で緩んだ。怖くてしょうがない。

『偽者』だけだったらまだしも、集団で来たら勝ち目がない。

「……安心しろ、俺が守るから」

柚原が私を抱きしめる。何も答えず、胸の中で甘えた。

夕方

「ごめん、saku。柚原の家に泊まることにする」

今、外に出るのは危ない。しかも、友達を巻き込むことはしたくない。

『そつか……、なんかあったら連絡してね』

「ん、ありがと」

そう言って電話を切った。

「……」

「セナ、夕飯出来たぞ」

「うん」

テーブルには、様々な料理が並ぶ。

「わー、全部冷凍食品ですか!」

「……作った」

とりあえず椅子に座る。そういえば、

「ねえ、お父さんは?」

一緒に住んでると聞いたのに、お父さんがいる気配がまったくない。

「離婚の原因が、親父の浮気だからな。浮気相手のところだろ?」

数ヶ月前から家には帰ってきてないらしい。

それと、もう一つ疑問があった。

「柚原…妹いたよね？」

「いねえけど…」

「!？」

ピンポン…

チャイムが鳴った。

「誰だ？」

柚原が席を立つ。私も必然的に立ってしまった。

「お前は来るな。俺の部屋行つてろ」

「嫌」

一緒に玄関へと向かう。

あれ?…柚原に妹がいた気がしたのに。前にも、こんな感覚があった。

私が知らない『時間<sup>トキ</sup>』がある…。

菊ちゃんが言つてた『あの時』、そして『今』。

『あの時』がいつのことなのか分からないけど、『今』との間が思い出せない。

ガチャッ

「!??」

私は柚原の背後に隠れ、横からチラリと覗く。

そこにはスーツを着た二人の男…そのうちの一人は見たことがある。

「sakuの…お父さん!!」

「警察だ。柚原君、署に来てくれるかな？」

恐れていたことが起きた。

## 7・ただ守る（後書き）

次話 0607（10時）

感想・誤字等受け付けます。

作者から

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

感想など、とてもうれしく思っております。（返事等返せなくてゴメンナサイ！）

話の設定が混乱してきたので、次話の投稿日を延ばさせていただきます。

そして、予告なしで番外編を更新しますので、

『ぶっちゃけ、この話よく分かんねえよ！このバカチンがあ！』って人は、

番外編を読んで下さい。とくに興味がない人は、0607に！それでわっ！

**番外編 1 この話の設定（前書き）**

設定だけなので、  
読むか読まないかは、あなた次第です！

## 番外編1 この話の設定

『人は食べ物です』

…いいえ、ケフィア

と、いうことで、番外編書いちゃいますね。  
まず時代背景。

少し未来の日本。4月と5月あたりの春。東京みたいな大きな都市にセナ達は住んでいます。

名前が漢字だったり、カタカナだったりしますが、世界観を変えるためです。

基本的にそれが名前です。『柚原』は苗字ではありません。

ある時、

科学者が『人肉は食べれるよ！』と発表したら、  
政府が『じゃあ法律にしちやえ！』ってことで、  
『人肉食用化』という法律ができました。

知ってると思いますが、フィクションですからね！

食べても異常が出ない。

身体の再生が可能（それなりの栄養素を摂れば、すぐに再生します）。

神経は再生不可能（一度切ったところは、再生しても痛みを感じない）。

味は人によって違うが、基本美味しいらしい。

食べれば、酒・煙草・薬物のように、快楽を得る。

依存性が無く、いくらでも食べれることが分かった。

だが、脳か心臓を食べると、全体の再生が不可能になり、死んでしまう。

若い者は身がしまつてて美味しいという噂が出て、誘拐事件が多くでるようになり、

政府は教育機関にこんな制度を与えました。

- ・ 3歳未満のお子様：親の同伴を強制 15時以降は家から出さない
- ・ 幼稚園児：親の同伴を強制
- ・ 保育園児&保育所：終始、警備を設ける
- ・ 小学生：授業は14時まで 先生同伴の集団登下校
- ・ 中学生：授業は15時まで 集団登下校

高校生はあまり決まっていらないが、女子と希望者は部活動の時間を制限するようになった。

## 裏の組織

どっかの悪い組織が

家族の誰かを殺し、その人になりきり、家族を暴走族やヤクザなどに売る組織があるらしい。

いわゆる、『偽者』が作られているようだ。

…この組織は本編ではつきりさせます。

まあ、こんなところです。

よく分からなくなったら、また番外編に書きます

## 番外編 1 この話の設定（後書き）

キャラの番外編を書こうと思ってますが  
がんばります

番外編2 セナの青・菊の白・ゲムファの赤・s a k uの黒・柚原の緑（前書）

キャラたちのサイドストーリーです。

意外なことが分かります。∴ そうでもないかな

『セナの青』

4月の始め、高校、中学校の入学式。

「お姉ちゃん！制服似合ってるよ！」

「そうかなあ？」

私、15歳。ナイトメア、12歳。

「ナイトメアの学ランも似合ってるよ！」

「ほんとう？」

「もう少し背が伸びたらねー」

「えー！！あ、そういえばさ、」

両親も祖父母もいない。いるのは、弟のみ。

「柚原と同じ高校なんだよね？お姉ちゃん、ラブラブだね！」

「そんなんじゃないわよ！ただ…」

祖母の家に住むことになった時から、柚原と一緒にだった。

「アイツのことを一番知ってるのは、私だけだから」

愛するモノは脆く、握れば壊してしまう、奪おうとしないのが私の弱点。

『菊の白』

高校1年生、初めての昼休み。

「菊ちゃん…だよね？」

「え、うん」

「私、セナ！よろしく！」

「…うん！」

高校に入って初めてできた友達がセナだった。

これがきっかけで、今日のうちに結構仲良くなった私たち。

「セナー！クレープ屋行こうぜい！」

「おっ、いいねー！」

今が楽しければそれでいい、ただそう思った。

『ゲムファの赤』

高校1年生、初めての放課後。

「お二人さん！どこに行くのかなあ？」

二人が仲良く喋っているところに飛びついた。それはセナと菊だ。

「えっーと……」

「あたしゲムファ！変わった名前だけど、よろしくね！」

大きく笑うと、あっちも笑ってくれる。

「面白いね！仲良くしょ？ゲムファ」

「んちゃ！」

あなたが受け止めてくれるなら、それに従うのみ。

『s a k uの黒』

高校3年生、春。家のリビングにて。

また殴られた。お父さんがいないから、ヤツは私を殴る。

「食べたくない」

目の前に出された料理を散らかした。それで殴られた。

ヤツはお父さんがいない時だけ、私を殴る。よくできたものだ。

血が繋がってない義母の作るものなんか食べたくない。

私は部屋に籠る。ヤツの顔なんか見たくない。

私はセナに電話を掛ける。中学校のときからの友達だ。

『どうしたの？s a k u』

「あ……」

警察長のお父さんより、彼女を頼りにしている。

「明日、また話すね」

『？え、…うん』

あなたの声を聞けるのが、唯一の幸せ。

『柚原の緑』

高校2年生、冬。自分の部屋にて。

またセナと喧嘩しちまった…なんでだ？セナは俺が嫌いなのか？

小さい頃はあんなに仲が良かったのに、最近はいきなり怒ったりするし…

「ぐあゝ！！腹立つなあ！」

考えれば考えるほど、君を好きになっていく。

番外編2 セナの青・菊の白・ゲムファの赤・s a k uの黒・柚原の緑（後書

こついう番外編は沢山書きたいですね！うひゃ

## 8・あなたは知らないだけで

「…ああ」

ちよっ…

柚原は私の顔を見ずに、警察の方へ向かう。

「あ…」

「ん？セナちゃんじゃないか？」

sakuのお父さんが私に気付いた。

ここで柚原の本当のことを言ったら、信じてくれるだろうか？

「あの！ゆ「セナには関わるな。とっとと連れてけ！」

柚原が大きな声で私の声を消した。

その言葉を残し、家から出て行く。

パトカーに乗せられる柚原を、ただ見るだけだった。

柚原が作った夕食を食べる。

家の中は静かすぎて、不安で涙が出そうになった。

アイツはちゃんと本当のことを言うんだろうか？

もし『偽者』がいるなら、アイツは無実…というか、罪は軽くなるはず。

でも、『偽者』が現れた時には、…私は殺される。

「柚原っ…！！？」

私はあることを思い出した。

「もしもし？菊ちゃん」

『セナ？あー今、柚原の家にいるんだっけ？sakuから聞いたよ』

「その柚原なんだけど…」

……

『はあ？警察に捕まったあ？今時万引きするとか…アホするなー』

「うん…そーだね」

あえてナイトメアのことは言わず、一人でいるということを伝えた。

「菊ちゃんに聞きたいことがあるの」

「何？」

「前に、『あの時は少子化が…』って言ってたの、覚えてる？」

「あー、言ったような気がするけど」

「あの時って、いつのことなの？」

これだけがどうしても気になっていた。

「そりゃ…」

私たちが中学生のときだったかな…

少子化が偉い進んで、ある村には高齢者しかいないことがあったし。

あと不況だったな…物価が倍になった時もあったからね。

他には、震災があつて…過去最大みたいなの。あと…

そこまでは覚えてる。

かなり困った時期もあった。

「あと？」

「日本が一回潰れた…分かる？」

「！？」

日本が潰れた？…どういうこと…それ？

私が知らない時間<sup>トキ</sup>。これなのか？

「菊ちゃん…」

「私もあまり思い出したくないんだよ…」

日本は数日間だけ、『活動を停止』したらしい。

人間も交通機関も何もかも…全てが止まった。

もちろん、私はそんなことは知らなかった。

「…」

「…セナ、電話切るね？」

黙り込んでしまった。一体、日本に何があったのか…私の身にも…詳しく知りたい。

私は勝手に柚原のノートパソコンに電源を入れた。ネットに数年前のことが書いてあるかもしれない。

「大震災があつた年だから…」

数少ない記憶を頼りに、色々なワードを検索してみた。

警察署

「さあ、なんで殺したのか教えてもらおうか？」

「…」

狭い部屋に警察が2人と、パイプ椅子に座り下を向いたままの柚原。警察官が怒鳴るが、何も動じなかった。

「おい！」

「一つ…聞いていいか？」

「なんだ？」

柚原はやつと顔を上げた。彼の微笑が、警察官の表情を変える。

「自分以外の人間を食べたら、殺したことになるのか？また生えてくるのに」

他人を食べると、一時的だが血液に異常が見られるらしい。

先程した血液検査で、ナイトメアを食べたことが分かった。

政府は『自分以外の人間の心臓か脳を食した場合、死刑とする』と

「だが、ナイトメア君は肉片はどこにもない…全部食べたのなら、再生は不可能だ！」

「…いいこと教えてやるよ」

柚原は口の中を警察官に見せる。

「ん？」

「政府は心臓か脳を食べるの再生ができないと言ったが、…それより、

それを喰った奴の口の中は血が止まらないほど爛れるってな。しかも、治るのに数週間は掛かる」

心臓か脳には特別な細胞があつて、それは唾液に異様な化学反応を  
起こすらしい。

柚原の口の中は、綺麗なままだった。

8・あなたは知らないだけで（後書き）

次話 0608

感想・誤字等受け付けます。

## 9・生き血の飲み方

セナの学校の生徒会室

…暇だ。

「ひまひまひまあ！！！！！！！！」

生徒会長3年生 鴨川<sup>かもがわ</sup>。女

「会長、掃除して下さいよー」

副生徒会長2年生 子トラ。男

「…子トラ、あんた、好きな人とかいないの？」

どーでもいい質問をしてくる生徒会長。

せっかくの休日を使って生徒会室を掃除しようってなったのに、何もしてくれない。

「いますよ。実は」

真実を嘘にさせるのが、俺の役目。

警察署

「なんだとっ！？」

「はい…奴は腕は食べたと言ってますが、心臓や脳を食べた形跡は無く…殺してはないと」

「…っ」

警察長であるsakuのお父さん・takumatuは、それを聞いて顔を歪める。

「なら仕方ない！明日また調べるぞ！」

「はい！」

「…俺はどうなるんだ？もう、用は無いよな？」

取調室から出てきた柚原。

takumatuは悔しそうな顔をしている。

ナイトメアの『偽者』は賢かったんだろう。自分の跡は残さなかった。

『偽者』に…指紋はないのか？

「俺に心当たりがある」

「なんだ？」

「聞いてくれるのか？それと…」

セナには今後一切、絶対関わるな。

## 柚原の家

検索し続けていると、背景が真っ黒なサイトに辿り着いた。

あの時の出来事というか、誰かの体験談みたいだ。

その記事が更新されたのは、今から5年前。それにはこう書いてある。

『暗い。外が暗い。でも、今日は電気が点いている。ここは病院。精神科。』

ここは病院。妻がそばにいる。なんでだ。娘が死んだと泣いている。俺が殺したと言っている。なぜ？いつ？何も思い出せない。

明日俺は違う病棟に移られるらしい。帰りたい。妻はどこかへ消えた。』

怖い…何この記事。

多分この男性は私と症状が似ているようだ。

彼が始めに言っている『暗い』というのは、『夢』みたいなもので、それを見ている時に自分の娘を殺した。だから思い出せない…と。

私はそう考えた。

「あ」

次の日に、また更新してる。

『違う病棟には、年配の人や子供など、沢山いた。近くにいた男性に問う。』

その人は自分の女を殺した、と言った。皆、誰かを殺してる。だか

ら、ここにいる。  
もうパソコンを使うと言われた。まだ思い出せそうにない。帰りたい。』

それ以降の更新は無い…この人は今どうしているのだろうか。他のサイトにも、この男性のようなことを言ってる人もいた。誰かを殺して、その記憶が無く、精神科に連れてかれる。私も…誰かを殺したのかな？

ピンポン…

「!?!」

家のチャイムが鳴った。

まさか『偽者』のナイトメア!?!それとも柚原？

ドアにチェーンを掛け、隙間から覗く。

「あの…」

「あ！夜分にごめんなさい！

柚原さん居ますか？俺、大巻高校副生徒会長の子トラっていいです！」

え…聞いたことがある名前だ。大巻高校は通っている高校の名前。私はチェーンをはずし、姿が全部見えるまで開いた。

「あの…柚原は今居ないんですけど？」

「あなたは？もしかして、セナさんですか？」

「知ってるの？」

「後で家に寄ろうと思ってたんです!」  
「？」

持っていた鞆の中から、書類を2枚取り出した。私と柚原の分。

一旦、書類に目を通す。

「少しの間だけ、お話できませんかね？」

子トラはニツコリと笑った。

## 9・生き血の飲み方（後書き）

次話 0610（10時）

感想・誤字等受け付けます。

10・癒えないモノ（前書き）

やっと10話目だ！！

子トラ君は絶対可愛い！

## 10・癒えないモノ

柚原の家に、高校の生徒会副会長の子トラがやってきた。

「話を簡潔に言いますと、兄弟か姉妹の確認に来たのです!」

「はあ……」

まだニコニコしてるよ……。目の前にお茶を出すと、深く頭を下げてきた。

そう、…可愛い。子トラは学校一カッコカワイイで有名だ。

金髪で整いすぎた童顔…長身で…まあ、可愛い。(上手く表現がでない)

全校集会でしか見たことなかったな…。

「あの、私の弟は…」

「？」

「誰かに…食べられてしまって」

「え!？」

私はどんな顔をしていたのだろうか…。

子トラが異様なぐらい焦っている。

「具体的に、…覚えてますか？」

ポケットからメモ帳とペンを取り出し、スタンバイする。

私は柚原から聞いたことを話した。

「…で、ナイトメアに似た人が」

「そうですか…。あ、柚原さんは？」

「今出掛けてて…」

いくらなんでも警察に捕まったなんて言ったら…。

すると、ガチャ

玄関のドアが開く音がした。

「!……柚原!」

「セナ!…誰だてめえ?」

「こんばんわ!生徒会副会長の子トラっています!」

警察は再度調査することになり、柚原は帰ってきた。

私は子トラが来た理由と、ナイトメアが食べられたことを伝えたと言った。

柚原は関係なさそうな顔をしている。

「柚原さんって、妹さん居ますよね？」

子トラが聞くと、きょとん顔をした。

私も前に似たことを聞いたから、驚いたのだろう。

「居ないよな……セナ？」

「私に聞かないでよ！」

「おかしいですね……戸籍上では居るんですけど」

子トラは何枚にまとめられた書類をめくり、柚原のを探す。

その書類には生徒の個人情報や詳しい家族構成が書いてあった。

そして、柚原の書類の家族構成には『妹 折鶴おりづる』と記されている。

「あ！折鶴ちゃんだ！遊んだことあるよ！」

私は思い出した。昔、柚原が休みの日に折鶴ちゃんを連れて、私の家に来たことがある。

ナイトメアの妹分って感じで、仲が良かったのを覚えている。

だが、柚原は首を傾げている……思い出せないのかな？

「俺は……知らないな」

「……そうですか」

子トラは大きく溜め息をついて、『妹 折鶴』の文字の上に2本の横線を引いた。

私は子トラと柚原の顔を交互に見る。

「なんで消すの？柚原が覚えてないだけで、どこかに」

「多分、妹さんは死んでます」

「！？」

子トラは柚原を睨むように見つめる。

「あなたが殺しました」

「……は？」

書類を鞆にしまうと、子トラは口を開く。

私には理解ができない。柚原が折鶴ちゃんを殺したの？

「セナさんも柚原さんも知っているでしょうか？…数年前のあの出来事を」

「うん」

「これは…色んな方に聞いた話で、本当ってわけでもないんですが…」

子トラは話し出す。私が知らない、あの時の出来事を。

10・癒えないモノ（後書き）

次話 0612（10時）

感想・誤字等受け付けます。

## 11・あなたのどこかに

子トラはノートを開き、調べたことを読み始めた。

日本国民は、あまりの不況や不幸が続いて、鬱になる人が増えた。その人の精神は崩壊、自分の家族を躊躇なく殺した。

目が覚めても、自分が殺した家族のことを思い出す人はいなかった。国民は記憶を失っている人のことを、『眠っていた人』と呼んだ。医者は聞いた。「どのくらい眠っていた？」かと…。

数日と答える人もいれば、数週間、数か月、数年と、言う人もいた。答えは皆曖昧。もちろん、本当の期間なんて誰も知らない。

「え…？」

「医者もまた…いや、国民全員が『眠っていた』から」

「！？」

頭の回転がいい人や幼い子供は、鬱の回復が早かった。治った人が『眠っていた人』の回復に努める…っていうことになった。

「子トラ：正確には、何年前の話になるんだ？」

「俺の予想では6年前で、完全に『眠っていた人』がいなくなったのは3年前ですね」

私は子トラが持つてるノートを見せてもらった。

そこには細かい年表みたいのが書いてあった。

それと、人口ピラミットの図。不況の時より、3年前の時の方が高齢者が減っている。

死んだのか、殺されたのか…。菊ちゃんが言ってた『子供が増えた』って、

子供の数が増えたんじゃないくて、高齢者が減ったのかな？

ん？

私は一つの矛盾点に気付いてしまった。

最低でも3年前には、皆が目覚めてる…。

私にもその頃の記憶がある。高校の入学式とか…。

その前のことはあんまり覚えてない。いや、そんなことより私には…

「子トラ君、一つ聞いていいかな？」

「はい？」

「私ね、『人肉食用化』の法律が実施される前の記憶がないんだけど…」

「！？」

「そうなのか？」

「…うん」

「セナ、今のところ皆勤だよな？」

「うん」

「学校でも結構前から話題になってたぞ？…聞いたことないのか？」

「うん…。言っただじゃん、柚原が新聞見せてくれた時に初めて知ったって」

「「「」」」

柚原と子トラは茫然としている。

二人の話からだと、『人肉食用化』の話題が出てきたのは、

私が高校2年生の夏ぐらいからだっらしい。

「学校で過ごしてた思い出はちゃんとあるけど…この法律を知ったのは、最近のこと」

自分の発言を不思議に感じた。

高校2年生…。夏は友達と海に行って、冬は修学旅行でハワイへ行った。

全部思い出せるのに、法律のことは全く思い出せない。

まるで、その『人肉食用化』<sup>ワード</sup>だけが、記憶から切り取られたような…。

「「」」

「あの…」

「セナさん。今度、学校で詳しく聞いてもいいですか？」あっちの

世界』のこと」

「え？」

「それもまた詳しく教えますね」

子トラは出した書類やノートを鞆にしまつと、一礼をして玄関に向かった。

「もう帰るのか？」

「はい。…セナさん、また後日に」

ニツコリと笑つて、家から出て行った。

## 11・あなたのどこかに（後書き）

次話 一時更新停止

感想・誤字等受け付けます。

## 12・何を奏でる（前書き）

久々の投稿になります。

止めてしまつてごめんなさい！

## 12・何を奏でる

柚原の家で一泊して、朝、一度自分の家に帰り荷物を取りに行った。少しの間、柚原の家に居座ることにした私。まだ家には血と悪臭が残っている。

制服に着替え、大きな鞆に衣服と日用品を入れた。

「ねえ、柚原の家に寄ってたたら、学校間に合わないかな？」  
部屋の前で待っている柚原に話掛ける。

私が一人になると危ないので、ついてきてくれた。ちょっと嬉しい。  
「ギリだな。鞆が重くなるなら、置きに行ってもいいぞ」

どっちでもよかったが、家に寄ることを諦めた。

2人で歩く通学路。なんか静かだった。

急いで走ってるサラリーマンのスーツの袖から、チラリと包帯が見える。

自分を傷つけてまで、食べたいと思えない。目を逸らすと、体が身震いした。

『偽者』が残したナイトメアの臭いが、自分の感覚を悪くした。

クラスに着くとまだHRは始まっておらず、皆はお喋りしていた。

元気そうだが、包帯をしてる人が目立つ。5月にもなり、袖を捲る人が増えたからか。

「セナ！」

sakuが私に声をかけた。

さつき子トラがクラスに着たらしい。私に用があると。

放課後、別校舎の生徒会室に行くことにした。

そこに、ソファに座っている子トラ。向かいのソファに案内され、恐る恐る座った。

「…用件は？」

「今日、同じクラスの菊さんは来られましたか？」

あ…

「来てないですけど」

菊ちゃんが学校を休むなんて、珍しいことだった。

「本日、菊さんはお亡くなりになりました」

「え、…えええ！？冗談言つのやめてくれない！？」

ガラッ

「冗談じゃねーよ」

仏頂面で生徒会室に入ってきた、生徒会長の鴨川。

部屋の端にある一人掛けのソファーに豪快に座ると、大声で笑い出した。

「誰も女王に勝てねえよ！！アッハハハハ！！」

「会長！それを言っては…」

子トラが焦り出す。

「…『女王』って？」

「この人喰いの法律考えたやつだよ。政府よりも、天皇よりも権力がある」

鴨川は笑いを堪えるのが必至な顔をしている。

胸ポケットから一枚の写真を取り出し、私に差し出した。

そこには腹部の臓器がむき出しの死体が写っている。しかも、

「菊ちゃんだ……うつ」

吐き気と同時に写真を床に捨てた。

鴨川は再びソファーに座り、足を組む。

「女王に勝てるのは、接することのできる私くらいだ」

「！??…え？」

ドヤ顔で私を睨む鴨川。

「私と子トラは、女王唯一の手下だ」

## 12・何を奏でる（後書き）

次話 未定。（10月以内）

感想・誤字等受け付けております。

短編を別で考えております。

### 13・誰も触れないような（前書き）

色々遅くなりました！

カメさん更新になりました…

鴨川さんは北 景子www

### 13・誰も触れないような

女王は家族の一人を殺して、『偽者』を作りだし、家族に馴染ませる。

そして、残りの家族を誘拐して女王の食用とされる。

味見して女王が気に入ったらその人の体全てを食べられ、不味かったら暴力団に売り飛ばされる。

「…鴨川さんたちは？」

「私と子トラには弟がいてな、いつの間にか『偽者』に入れ替わってて、

目が覚めたら女王の前で寝てたよ」

「…」

「両親は隣で脳と心臓だけ喰われて死んでたよ」

「ちよっ…」

「私の味は良かったみたいでね、腕をムシヤムシヤ喰ってたよ……」

子トラも一緒」

鴨川は子トラに視線を送ると、子トラは右手で自分の左肩を思いっきり叩いた。

ズズッ…鈍い音が小さく鳴り、肩から垂直に左腕が落ちた。

袖が赤く滲み出したが、子トラは笑っていた。

「！??？」

「脆くなつてきちゃった…会長」

「女王に言え」

子トラは腕を拾うと、再び肩に戻した。

「う、腕が…」

「女王は欲張りで、美味な僕たちの脳や心臓を食べたくないみたい。週に数回、こうやって腕や体の一部を差し上げてるんだ」

「何回も切ってるから…回復しづらくなってきたな」

鴨川は微笑すると、窓から外を眺める。

外はだんだん暗くなってきた。

「私たちも時間の問題だ。飽きられたら食べられる」

「……」

黙り込んでしまった。

私は女王の正体なんて知らない。

でも、こんな強気な鴨川さんでも恐れる存在なんだ。

だけど……この二人だけが女王を倒すことができる。

この惨い法律も！

「あんまり沈むんじゃないよ……。生きてただけでも良かったから」

「うん……」

「実際にはセナさんに協力してほしいことがあって来てもらっただけなんです。

あなただけが知ってる記憶……。でも、その前に」

子トラがドアを見ると、柚原が入ってきた。

「柚原！？」

「色々調べて分かったことがあったんです」

「私たちはあくまで女王の食糧。だけど、そこまで酷い奴じゃない。質問すれば、ちゃんと答えてくれる」

「……ゆ」

「柚原あ……お前、女王と身内の関係にあるんだってな？」

「……！？」

「……」

柚原は無表情で鴨川を睨む。

この空気に嫌気が出たのか、子トラが焦っている。

私は真相を聞こうとした途端、激しい頭痛に襲われた。

### 13・誰も触れないような（後書き）

次話 11日（10時）

感想・誤字等受け付けます。

14・耳がなくちゃ聞こえない（前書き）

子トラ君モデルは溝端 平君でWWW

## 14・耳がなくなちゃ聞こえない

「!!!」

変な頭痛のせいで倒れ、私は先生がいない保健室に運ばれた。外はもう夜だった。

「大丈夫ですか？会長が力持ちでよかった」

「黙れ」

「…柚原は？」

「帰ったよ」

柚原は倒れた私を気にすることなく、無言で帰ったらしい。

悲しい思いがこみ上げて泣きそうになったが、我慢した。

「あれだったらタクシー呼ぼうか？」

「…」

「あ！」

子トラはセナの沈黙を受け取って鴨川に話した。

今セナの家は入ることが出来ず、柚原の家に住んでるということを知った。

私は柚原の顔を見なくなかった。正直にいうと帰りたくない。

「…私たちの家に来るか？」

「へ？」

鴨川の提案に、子トラは何故か喜んだ。

「ここに住んでるの」

「ほえ」

目の前にあるのは高層マンション。

この辺りでは一番デカイマンションだ。

「私と子トラは死んだ親の金出しあつて、最上階に住んでるの」

「すご！え？二人って付き合ってるんですか？」

「いいや。お互い好きな人はいるよ」

鴨川は優しく笑い、手招きした。

セキュリティがちゃんとしていて、指紋と顔の認証装置があった。ロビーの床が大理石で、もの凄く豪華な作りだ。

エレベーターで最上階に着き、私は驚いた。

ドアが一つしかない…、

「まさか、最上階全部が部屋なんですか!？」

「そ、そうだけど」

カードキーで開けると、美しい夜景と綺麗なリビングが一面に広がった。

セナはそこまで裕福な家庭で育ったわけでもないし、友達に大金持ちがいるわけでもない。

リビングを一周し、お風呂を見たり、トイレを見たりと、はしゃぎまわった。

「sakuの家も広かったけど、やっぱり夜景があると違うな」

子供のようなセナを見て、鴨川と子トラは笑った。

セナは柚原のことなんかどうでもよくなっていた。

それから子トラとゲームしたり、鴨川と一緒にお風呂に入ったりと、久しぶりに友達と遊ぶ感覚だった。

「ふー！お風呂気持ち良かったあ！プールみたいで」

「人ん家の風呂でバタ足する奴初めてだわ」

笑いあって、お菓子を食べながらテレビを見ていると、いつの間にか深夜を過ぎていた。

「もう寝るかな。セナは私の部屋においで」

「会長ー！3人で寝ましょうよー」

「何言ってるの？子トラは自分の部屋！」

まだ遊び足りないのか、子トラは寝るのが惜しそうだった。鴨川の部屋は広く、真ん中に大きいベッドが置いてある。

「今布団持ってくるから、ちょっと待ってて」

そう言っただけで鴨川が部屋から出た途端、セナは柚原を思い出した。

（明日学校で会いたくないな……!）

「セナー、このタオルケットでいいかな？」

「鴨川さん！明日、学校の創立記念日で休みですよね？」

「そういえば…そうだね」

安心した。鴨川は布団を敷き、セナと目を合わす。

「明日、女王に会おうか？」

14・耳がなくなっちゃ聞こえない（後書き）

次話 14日（10時）

感想・誤字等受け付けます。

## 15・私の居場所（前書き）

今回短めになりました。

## 15・私の居場所

「女王……」

「朝、子トラと相談してみるね」

「……うん」

鴨川はセナが布団に入ったのを見て、電気を消した。

フリルのエプロンを着て朝食を作る子トラ。

私は不思議な光景に思ったが、楽しそうだったので何も言わなかった。

テーブルに次々と料理を運ぶ。

フレンチトーストにスクランブルエッグ、サラダと特製フルーツジュース。

「おいしそう！子トラ君が毎日作ってるの？」

「はい！会長は朝弱いですから……」

そつえば爆睡してたな……。

「せっかく学校がないんだし、寝させてあげてください」

「うん！」

子トラの椅子と向かい側に座る。

久しぶりにまともな朝食を食べた気分で、自然と笑顔になった。

「子トラ君、鴨川さんに女王に会おうって言われたんだけど……」

「え……」

鴨川はまだ寝ている。子トラは食後のコーヒーの準備をした。

高そうな洋菓子店の箱から、マフィンを取り出す。

無言でセナの前に置いた。

「前にも言いましたが、セナさんは僕たちにはない記憶がある」

「……」

「あるって言うか……セナさんはこの『法律』の存在を知らない、

謎の空白があります」

「でもそれって、法律が始まる前に一部の人が人殺ししたことを覚えてないってやつと、

一緒じゃないのかな？」

「それとは別っていうか…んー…」

「お前はどこの世界にいたのか…って、ことだよ」

「！？」

鴨川がお腹をボリボリと掻きながら、セナを睨んだ。  
パラレルワールドって知ってるか？鴨川は続けた。

## 15・私の居場所（後書き）

次話 19日（10時）

感想・誤字等受け付けます。

## 16・もう一つの日本（前書き）

いつの間にか終盤です。

## 16・もう一つの日本

女王は前に言ってたんだ。

『別の日本にいる一人の人間を連れてきた』って。

そいつはこの日本が不況になったのも、法律が出来たのも知らない。法律が開始されたと同時に、

「私が来たってこと？」

「…こっちの日本にいるセナと入れ替わったんだ。

パレルワールドは世界観が違っただけで時間は平行してる」

「なんか複雑…」

「逆に言うなら、今あっちの日本にいるセナは、不況の事も法律の事も知ってる」

「でも私は、鴨川さんが会長ってことも知ってるし、柚原や友達も…」

「多分、あっちの日本と近い作りになってるんだね、こっちの日本は」

そういえば、あっちの日本は不況には程遠かった。

少しの貧富の差はあったが、物価や消費税が高くなったわけでもない。

特に不自由のない日本だった。

鴨川はコーヒーを飲み、一息つく。

すると子トラは、セナに頭を下げた。

「ごめんさない！セナさんが記憶がないってことを聞いて近づいたんです！

危険な目に合わせたくないんですが…」

「？…関係あるの？」

「女王が言うには、そいつだけがこの法律を変えることができるからさ」

「…！？」

「どうしてなのか分からないけど、セナが法律を変えて、私と子トラが女王を殺す」

昼食を食べ、女王の場所へ向かう。

着いたのは、古めの洋館だった。

「入るよ」

「…待つて！」

門を開けようとする鴨川を止めるセナ。

「私がいた元の日本にいるナイトメアや菊ちゃんは…死んだの？」  
鴨川は表情を変えずに頷く。答えは分かっているのに聞いてしまった。

あつちの日本に戻れたとしても、誰も救えない。

門から家までが遠く、その道が所々血で赤くなっている。

ドアを開けると、広い空間に黒い影が一つ。

ごくりと、唾を飲む。

「女王、連れてきました」

「…」

声が聞こえない…なんか喋ってるみたいだけど。

「あの…」

「セナちゃん…？」

「…！…はい！…………？」

少し高くて、小さい声。

聞いたことのある声だった。

私は疑った。この声の持ち主を知っている。

「まさか…」

「こんな形で会うなんて、思わなかったね」

この人が女王なんて、想像もつかなかった。

## 16・もう一つの日本（後書き）

次話 25日（10時）

誤字・感想等受け付けますか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3591t/>

---

人は食べ物です

2011年11月20日01時13分発行